

赤谷の森だより



赤谷プロジェクト地域協議会
財団法人日本自然保護協会
赤谷森林環境保全ふれあいセンター

第 13 号



「ムタコの日」で森の手入れ



ムタコ沢支流で水質調査



中央部を撤去した茂倉沢治山ダム

コラム* 赤谷の森から

ともに歩むことの大切さ

(財) 日本自然保護協会
茅野 恒 秀



新年あけましておめでとうござい
ます。2010年を迎え、赤谷プロ
ジェクトは7年目の春を迎えようと
しています。

昨秋に実施した、赤谷地区茂倉沢
での治山ダム撤去作業は、新聞、雑誌、
テレビなどで数多く紹介され、全国
の注目が集まりました。「赤谷の森」
のちようど真ん中あたりにある茂倉
沢では、大正時代に酢酸採取事業で
大規模に森林伐採が行われ、戦中戦
後の物資不足、昭和22年のカスリン
台風による被害により森が荒れてい
ました。そのため、山崩れによる下
流への土砂災害を防ぐために、多く
の治山ダム(堰堤)がつくられました
た。それから数十年がたち、森林の
防災機能が回復したため、沢が本来
もっている自然性をとりもどすため
に、治山ダムのひとつを基礎から撤
去しました。全国で初めて行われた
画期的な溪流環境復元の事業です。

「全国で初めて」「画期的」という
形容に比べて、「治山ダム」といわれ
ても、地域のみなさんには遠い山奥
のできごとのように思われるかもしれ
ませんが、「赤谷の森」の
奥深い自然に刻まれた歴史は、地域
の人々がどのように自然環境とつき
あってきたかを示す歴史そのもので

す。

新治地区北部の水源である西川上
流・ムタコ沢では、赤谷プロジェク
ト地域協議会が中心になって「ムタ
コの日」が行われています。この活
動は、ムタコ沢に本来あるべき森林
と水環境をとりもどし、「いい水を
ずっと飲める」ようにする試みです。

治山ダム撤去による溪流環境の復
元も、ムタコ沢の水源を保全する活
動も、地域住民や行政など赤谷プロ
ジェクトに集うメンバーが、それぞ
れの立場や事業を用いて、森林や沢
の「本来の姿」を実現するために取
り組んでいます。その点では、どの
活動も根っこに通じた思いは同じな
のです。これは、みなかみ町が掲げ
る「水と森林の防人」としての姿を、
体現するものかもしれません。

今年10月には、地球上の生物が本
来の多様な営みを維持し続けること
の重要性と、その世界的な保全や修
復の方法を考える国際条約(生物多
様性条約)の会議が名古屋市で行わ
れ、世界の190を超える国と地域
の人々が集まります。赤谷プロジェ
クトの参加メンバーが、それぞれの
立場を超えて、ともに歩みを進めて
いることを、世界の人々にも伝えて
いきたいと思っています。

赤谷プロジェクト紹介

赤谷地域の国有林の

計画づくりに向けて

関東森林管理局計画課

赤谷プロジェクトでは、地域住民でつくる赤谷プロジェクト地域協議会、財団法人日本自然保護協会、林野庁関東森林管理局の3者が協力して、森林の整備・保全や調査研究、環境教育活動などを進めています。また、調査研究などの活動は、多くのボランティア（サポーター）や専門家に支えられています。

一方、プロジェクトの対象である「赤谷の森」は国有林であり、人工林の間伐などの森林整備、国土保全のための治山などについて、森林管理局長が5年単位の計画を作り、これに基づいて行っていくことが法律で定められています。

そこで、赤谷プロジェクトの活動を通じてわかった森の生態系の特徴や、3者で話し合ってきた管理の方針など、プロジェクトの成果をこの計画に盛り込んでいくこととしています。

現在、新たな計画づくりの検討を進めているところであり、今回は、この計画について紹介します。

地域管理経営計画について

森林は、水はぐくみ、国土を守り、多様な生物がくらし、木材を生産して私たちのくらしに役立つなど、多くの役割を果たしていますが、森林が育つには、非常に長い年月がかかります。そのため、森林の利用や保全は、将来を見通して、計画的に行っていかなければなりません。また、各地域の森林は、それぞれ特色や自然条件が異なり、社会のニーズ（需要や要望など）も変化していきます。

このため、国有林については、全国を158の区域（流域）のまとまりに分けて設けた「森林計画区」ごとに、管理の方針を明らかにする「地域管理経営計画」と、どこでどのような伐採や造林作業を行うかといったことを定める「国有林野施業実施計画」を5年ごとにつくり、これらに基づいて事業を実施しています。

計画の内容

「赤谷の森」は利根沼田森林管理署が管理する「利根上流森林計画区」のまとまりに含まれ、平成22年度に新たな計画をつくりまします。

計画では、次のような内容を定めます。

○森林整備の進め方

○伐採や造林を行う場所と具体的方法や数量

○林道の計画

○治山の計画

計画をつくる際には、対象とする森林がどのような森林なのか（人工林・自然林、樹木の種類、樹齢、樹木の密度など）、どのような環境にある森林なのか（地形、地質、林道からの距離など）などを調査し、地域のニーズも把握します。この

ための情報は、現場の利根沼田森林管理署がもととなる資料をつくり、関東森林管理局がより広い視点を加えて計画書案をつくりまします。その過程では、市町村や県行政、有識者の意見を聞いたり、計画案を公表して一般の方からの意見を求めまします。

「赤谷の森」の新たな計画づくり

赤谷プロジェクトが発足したのは平成16年ですが、その翌年に「地域管理経営計画」と「国有林野施業実施計画」を作成した際には、プロジェクトが始まって間もなかったことから「赤谷の森」独自の森林整備の方針を具体的には記述しませんでした。

その後5年がたち、赤谷プロジェクトでは、現在の森林の姿と、伐採や植林など人の手を加えない場合に成り立つ自然林の姿とを比較したり、イヌワシ・クマタカなどの大型猛禽類、テンやニホンザルなどの哺乳類が、森をどのように利用しているかを調べてきました。また、人工林を伐採した跡地にどのような自然の植物が成長するのか、治山ダムの一部撤去など、実験的な取り組みも行うことができました。これらの活動を通じてわかってきたことを、新しい計画に反映させていきます。

こうした検討を、計画をつくる最初の段階から、赤谷プロジェクト地域協議会、(財)日本自然保護協会、専門家、ボランティアなどともに行うのは全国でも初めてです。そのため、関係者は、どのような内容を計画に盛り込むべきか、という出発点から意見交換をしています。

生物多様性の復元と持続的な地域社会づくりをテーマとする「赤谷の森」の当面の重要な課題は、戦後に植林されたスギやカラマツなどの人工林を、どのように管理（間伐や収穫、場合によっては自然林に修復するために除去も）していけばよいのかというものです。

人の手によって植えられた人工林は、樹木の種類も、樹齢も同じです。多くの生物のすみかという観点からは、色々な種類・樹齢の樹木たちから

将来の森林の姿を目指して

赤谷の森の森林管理の方向

将来の森林の姿を目指した取り扱い

人工林は、一部を除いて、将来は広葉樹が混じった森林や広葉樹林へと誘導します。一部の人工林は、様々な生物の生息・生育との両立を図りつつ、継続的な木材生産を行います。



なり、低木や草本も生育する自然林に誘導していくことが望ましいと考えられます。しかし、人工林を広い範囲で一気に伐採しては、大量の土砂が流出して水源などに悪影響を及ぼすおそれもあります。また、ねらい通りに自然林に誘導するには、人工林の中やその周りに、ブナやミズナラ、サクラなどの種を供給する母となる木（母樹）が生えていることが必要です。それも、母樹が自らの子孫となる種をどこまで広げることができるかは、詳しくわかっていません。このため、人工林をどのように管理すれば、期待する自然林に近づけることができるのか、実験を行っていく必要があります。

一方で、人工林は再生が可能な資源である木材の生産の場であり、継続的な林業が行われることにより山村地域の雇用場づくりにつながるという面においても、重要な役割をもっています。この役割を継続させていくために、条件のよい人工林を選び出すとともに、そうした木材生産のための人工林でも、多様な生物が生息・生育できるような条件づくりにも取り組む必要があります。

また、いずれの場合も、若い人工林は、樹木の成長に伴って本数を減らしていく「間伐」をしっかりと行っていく必要があります。

さらに、猛禽類の生息環境の維持・改善、湿地など特別な環境でくらししている生物の保全や溪流環境の復元なども重要であると考えています。

このような考えにたつて、今年3月をめどに、プロジェクトの成果を新たな計画に盛り込むための検討を進めています。

地域の皆様の意見を聞かせて下さい

「赤谷の森」はかつて、薪の採取や炭焼き、かや場の利用、きのこや薬草を採ったり、植林などの労働の場として地域経済・生活と強く結びついていました。しかし近年では、生活様式や経済の変化により、人々の暮らしと森林との直接の接点小さくなっています。一方で、森林の生態系がもつ生物多様性や水をはぐくむ力、近年では地球温暖化防止など、森林がもつ多くの役割に期待が高まっています。

自然林に誘導する場合は、その環境に適し、その地域にもともと生育していたと思われる樹種のうち、代表的な3つのタイプの森林を目指します。

ブナ・ミズナラ林



標高が高く雪の多いエリアに生育する森林で、赤谷エリアの多くを占めます。

クリ・コナラ林



ブナ・ミズナラよりも低い、標高約900mを上限としたエリアに生育する森林です。

溪畔タイプの森林



溪流沿いなどに成立する、サワグルミ、ハンノキ、カツラなどが生育する森林です。

新たな計画をつくるにあたっては、特に地域がどのようなニーズをもっているのかが、重要な意味をもちます。

しかし地域の方々も、国有林に対して漠然とした期待や要望をお持ちになっても、それをどのように伝えていけばよいか分からないという面があるかもしれません。

赤谷プロジェクトには、地域住民でつくる地域協議会が結成され、活動の中核団体のひとつになっています。その地域協議会と(財)日本自然保護協会が中心となって、地域住民のご意見を交換する場を設けて、自由な雰囲気の中でお話を聞かせていただきたいと考えています。これまで、国有林の管理経営に関して、このような取り組みは例がありません。お寄せいただいたご意見は、計画をつくる際に、できる限り考慮していきたいと考えています。

おわりに

冒頭にご紹介したとおり、国有林の計画は、5年ごとに見直しが行われます。立場の違う3つの組織が協力して行われる赤谷プロジェクトは、目的や3者の協力関係が先制的と評価されていますが、平成22年度につくる計画は、赤谷プロジェクトの6年間の活動成果として社会に発信されます。

前例のない取り組みであるため、すべてが手探りであり、完璧なものとはならないかもしれませんが、できる限りよいものとしていきたいと考えています。



「赤谷の森を語る会」の様子

昨年の12月13日(日)には、地元の猿ヶ京地区多目的集会施設において、「赤谷の森」に隣接する各区の区長さんや地域住民のみなさんと赤谷プロジェクト関係者で、この計画作成についての意見交換会「赤谷の森を語る会」を開催しました。今後、区やグループごとに、地域のみなさんのご意見を伺うことができるよう、準備を進めてまいりますので、ご協力をお願いいたします。

赤谷プロジェクト 地域協議会会員を募集中!!

赤谷プロジェクトは、林野庁関東森林管理局と(財)日本自然保護協会、そして地域の組織である私たち「赤谷プロジェクト地域協議会」の連携によって運営される自然環境管理のまったく新しい協働の仕組みです。三者の直接的な合議によってプロジェクトの意思決定がなされ、地域協議会が重要な主体となっています。

会員は、「赤谷の森」および周辺地域の人々(主にみなかみ町民、沼田市民)で、現在のところ会員数は約50名ほどです。近い将来、NPO法人への移行をめざし、名実共にこのプロジェクトを推進する中核団体として機能させたいと考えています。

みなかみ町では議会が「環境力」宣言を行いました。また歴史を活かした町づくりの事業も進められています。私たちはこれらと協調し、共に協力することでよりよい持続可能な地域社会作り貢献していきたいと考えています。もしこのような考えに賛同していただけるのであれば、私たちと共に赤谷プロジェクトの活動にご参加ください。

みなさまのご参加を
お待ちしております!!



地域協議会キャラクターの
ムタコとムタオ

■赤谷プロジェクトに望むこと



みなかみ町立新治中学校教諭

岡田 千穂

体験型環境教育との出会い

ふとしたきっかけから環境教育と出会い、足を踏み入れてもうすぐ10年が経とうとしています。当時大学生だったわたしは、いくつかの法人団体のボランティアに登録して活動を行っていました。その中で、ある事業のお手伝いをし、偶然出会ったのが体験型の環境教育です。ちょうど総合的な学習の時間が創設され、学校現場が試行錯誤しながら取り組んでいた頃でしたが、当時に先駆的な実践をしていた学校教育関係者、そして野外教育関係者、社会教育施設関係者、その他専門的な知識と経験を持っていた全国の方々が一堂に会するという大々的な事業でした。3日間という短い期間ではありましたが、そのような方々と体験から学ぶ場を共有し、わたしのような一学生が普段なかなか接することのできないような方々と語り合うという、貴重な経験の機会を得ました。「学習」といえば、机上の学習で記憶力勝負のイメージしかなかった私にとって、教科教育で得てきた断片的な知識を体験を通してつなぎ合わせる経験は、今までになく新鮮なものでした。また、学びの場を提供してくださったまとめ役の方々と話し、つながりがもてたことは、自分の生き方を考える上で大きなターニングポイントとなりました。このとき得た価値観が、今の自分の礎となっています。

学ぶことの奥深さと面白さを肌で感じ、社会教育に携わる多くの方々と言葉を交わすうち、自らも学びの場を創りたいと思うようになりました。紙面の記録に頼る学習だけではなく、五感で感じ取った細胞の中の記憶から学び取るような学習の場を創りたい。教師という職業を具体的に考えるようになったときからの目標であり、今でもその思いは変わりません。今勤務している新治中学校では主に理科を担当していますが、体験学習のP D C Aサイクル（計画を立てて実践し、振り返る学習方法）を意識して50分の授業を構成しています。実験や観察などの生徒の体験を言葉に置き換え、知識へとつなげることで活用しやすくなるのではないかと考えているからです。

中学生にとつての体験学習の意義

中学生にもなると、「自然は大切」「環境を守ろう」という当たり前のことはほとんどの生徒が表面的には理解しています。その一方でなかなか言動が伴わず、校外ボランティア活動でビニール袋を片手に一生懸命道路清掃をしてきた翌日、学校の廊下にゴミが落ちていても見て見ぬふりをしてしまう生徒も少なくありません。頭では理解しているつもりでもなかなか行動に移せない、または頭で理解していることを現実の身近な事象に置き換えて考えることが難しい生徒が非常に多いのです。「自分が知らない、表面でしか理解していない」ことに気付いていないのが中学生の実態だと思います。頭だけでの表面的な理解ではなく、「これってここにつながっていたんだ」「そういうことだったんだ」という実感を持った理解は、生徒自身の行動をも変える原動力となります。また、自分が信じたものには驚くほど従順で、自分

で捉えた目標を達成するためには時間も努力も惜しまない、素直な一面をもっているのも事実です。難しいと感じることも多々ありますが、指導する側の関わり方や投げかけ次第でさまざまな表情をわたしたちに見せてくれます。だからこそ、各分野の先駆者や実践者とわたしたち学校教育関係者が連携し、質の高い体験活動ができるよう働きかけることは、非常に意義があると思うのです。生きることは絶えず何かを学び取っていくことです。覚えなければならぬという義務感ではなく、自らの意欲と意志で学び取った知識は知恵となり、巡らせた思考は信念となり、彼ら自身の人生を支える、生きる指針となっていくのではないのでしょうか。

赤谷プロジェクトへの期待

新治地区には日本でも有数の山林と複雑な生態系をもつ赤谷という地域があります。この希少な環境を次世代へとつないでいく、そのための第一歩が地域の実態や特色を知ることです。新治中では昨年度より、一年生の総合的な学習の時間で赤谷プロジェクトの方に講話をお願いします、生徒が地域を知る機会をつくっています。まずは知ること、そしてその事実ともっている知識を総動員して考えること、そこからすべては始まると思うのです。赤谷プロジェクトは、生徒が有意義な体験活動を行うための資源を数多く持っています。生徒が大人になる過程で、地域を支えてくださる多くの大人と触れ合い、豊かな体験を重ねてほしいと思います。



最近の活動紹介・活動のご案内

これまで実施した取組

●ムタコの日 (水生昆虫観察会)

今年度 2 回目の「ムタコの日」が 9 月 13 日、水生昆虫観察会の内容で開催されました。参加者は 42 名で、うち 15 名が子供さんでした。場所は、「赤谷の森」のムタコ沢と西川下流で行われました。



西川で水生昆虫の観察をしています

参加者が 3 班に分かれ、水生昆虫の観察や待ち時間を利用して森の生物や赤谷プロジェクトにつ

いても学びました。水生昆虫の講師は、元ジャパンフライフィッシング協会、水生昆虫に詳しい外山直彦(沼田市在住)さんがつとめ、わかりやすく説明されました。網を使って水中の虫を捕まえたり、石をひっくり返してみんなで調べてみました。カワゲラ、カゲロウの幼虫などが見つかりました。子供たちは水の中にいろんな昆虫がいて、びっくりした様子で熱心に楽しく学んでいました。



いろんな水生昆虫が見つかりました

おやつタイムの後、ムタコ沢から移動して西川に入り、生き物観察を行いました。下流の広い川では、水生昆虫の他、カジカまでも捕まえることができ、子供たちは大喜びでした。

参加者からは、「普段、川や沢の中を調べることはないで、数多くの昆虫が棲息していることがわかり、大変有意義で楽しい一時を過ごせました」との感想が聞かれました。

今後とも、地域協議会では、イベントを通じて水に関するいろいろなことを学びながらその大切さを実感できる機会を作っていきたいと考えています。

●新治小学校三国街道遠足への協力

みなかみ町立新治小学校 6 年生 56 名が 10 月 22 日(木)に旧三国街道を歩きました。当日は快晴で、見頃の紅葉が大変美しかったところです。

赤谷プロジェクト地域協議会、(財)日本自然保護協会、赤谷森林環境保全ふれあいセンター(略称 赤谷センター)が協力しました。



林さんから旧三国街道の歴史を解説

一行は、新潟県側の登山口を 10 時に出発し、三国峠〜長岡藩士の墓〜三坂茶屋跡〜田村家の墓〜東屋〜三坂線を降り国道 17 号線に 15 時に到着しました。

地域協議会の林泉さんからは旧三国街道の歴史について、長浜陽介さんからは自然や森に棲む生きものについて紹介がありました。



▼6年2組

▲6年1組



長浜さんがカツラの木の話をしています

今後の予定

●赤谷センターでは、主に群馬県内の自然や環境に興味のある方を対象に、「赤谷の森自然散策」を予定しています。

「赤谷の森自然散策」は、「赤谷の森」を、案内人の解説を聴きながら散策し、楽しみながら森林のしくみや動植物について学ぶことができます。今回は、広葉樹の冬芽や動物の足跡などについて学びます。皆様のご参加をお待ちしています。

おもろいので、地域協議会のブログ
も見てね。アドレスは、
<http://blog.livedoor.jp/nutakosawa/>
だよ。



ムクオ

ムクコ

三坂茶屋跡周辺では、一行を4班にわけ、赤谷センター職員と一緒に、動物の体温を感じてシャッターが切れるカメラ（センサーカメラ）を森に設置しました。新治小学校のみなさんにも、赤谷プロジェクトの調査を体験していただきました。カメラは1ヶ月後に回収し、撮影された写真を使って森に棲むいきものについて学ぶ授業を実施します。

児童のみなさんからは、「カツラの木から甘いにおいがすごい」、「権現清水が冷たくて驚いた」などの感想があり、地元の豊かな自然や歴史にふれ、大変印象に残った遠足となったようです。

赤谷の森 自然散策のご案内

第3回 H22. 2/14 日 場所 みなかみ町 旧猿ヶ京小学校、いきもの村
テーマ 「冬の森林・冬芽の観察、フィールドサイン」

- 参加資格 小学4年生以上（小中学生は保護者同伴）
- 参加費 無料
- 集合場所と時間 ①関東森林管理局(前橋市) 9時出発
②利根沼田森林管理署(沼田市) 9時50分出発
- 終了時間 現地で15時30分の予定
バスで集合場所へ戻ります
- 服装など 森林散策のできる服装（帽子、防寒着）
昼食・飲み物・長靴・雨具持参

募集要項

申し込み締め切り
実施日の4日前まで

申し込み・問い合わせ先
赤谷森林環境保全ふれあいセンター
TEL.0278-60-1272

編集部

だより



「赤谷の森」の取り扱いを決める次期地域管理経営計画等が来年度作成されます。赤谷プロジェクトでは、意見を計画へ反映させるため、地元住民の方との意見交換会を12月13日から実施し、ご意見をうかがっています。ご意見をお寄せになりたいかたは、地域協議会までお願いいたします。今後みなさまのよりいっそうのご支援をよろしく願いたします。

(赤谷の森のツツペ)

本誌や赤谷プロジェクトに関してのお問い合わせ先等は次のとおりです。

赤谷プロジェクト地域協議会

代表幹事 林 泉
TEL.0278-66-0888
事務局長 安田 剛士
TEL.0278-22-2119
<http://blog.livedoor.jp/mutakosawa/>

(財)日本自然保護協会

プロジェクト担当 茅野 恒秀
TEL.03-3553-4107
<http://www.nacsj.or.jp/akaya/index.html>
メールアドレス akaya@nacsj.or.jp

**林野庁関東森林管理局
赤谷森林環境保全ふれあいセンター**

所長 田中 直哉
TEL.0278-60-1272
http://www.rinya.maff.go.jp/kanto/kanto/akaya_fc/index.html
メールアドレス akaya_postmaster@rinya.maff.go.jp